

サマンサ・デ・シモーネ

ボツテイチエツリ  
と  
あそぼら

イラストレーション：フランチェスカ・ダルフォンソ



s i l l a b e

ISBN 978-88-8347-500-9

© 2009 Ministero per i Beni e le Attività Culturali

Soprintendenza per il Patrimonio Storico, Artistico ed Etnoantropologico  
e per il Polo Museale della città di Firenze



出版：

sillabe s.r.l. リヴォルノ

www.sillabe.it - info@sillabe.it

本文とゲーム：サマンサ・デ・シモーネ

グラフィックとイラスト：フランチェスカ・ダルフォンソ

編集：フェデリーカ・レーマン、ジュリア・バステアネッリ

翻訳：中嶋浩郎

写真：文化財監督局写真資料室、SPSAE 写真資料室、

フィレンツェ市美術館写真資料室、

ヴァチカン市国ヴァチカン美術館資料室、

## ぼくのはなし



iao チャオ。ぼくの<sup>な</sup>名まえはアレッサンドロ・フィリペーピ、<sup>に</sup>だけどみんなはサンドロ“ポッティチェッリ”ってよぶ。どうしてこんなへんなあだ名がついたのか、ぼくにもよくわからない。もしかしたら<sup>に</sup>バッチェローロ、つまり<sup>きんざいくしよくにん</sup>金細工職人だった兄さんのアントニオが、みんなに“バッチェッロ”とよばれていたからかもしれない。それとも、もう一人の兄さん<sup>に</sup>ジョヴァンニがふとちよで、みんながからかって“ポッティチェッロ”とよんでいたからだろうか。ポッティチェッロというのは<sup>た</sup>小さな樽って意味なんだ。ぼくたちのころはあだ名をつけられるのはあたりまえで、だれもおこったりしなかった。だからぼくも<sup>かぞく</sup>家族もみょう字がポッティチェッリになってしまっても<sup>もんく</sup>文句を言わなかったんだ。さて、ぼくのはなしをしよう。

ぼくは 1445 年にフィレンツェでうまれた。<sup>とう</sup>父さんのマリアーノは<sup>かわ</sup>皮なめし<sup>しよくにん</sup>職人<sup>かあ</sup>で、母さんはズメラルダといった。男ばかりの 4 人兄弟の末っ子で、いちばん上の兄さんがアントニオ、その下の<sup>に</sup>ジョヴァンニとシモーネは二人ともわんぱくだった。





サンドロ  
オオオ

住んでいたのはフィレンツェのオンニッサンティ  
地区にあるヌオーヴァ通り、いまのポルチェッラーナ  
通りだよ。うちの近くには、機織職人や皮なめし  
職人の仕事場がたくさんあった。

小さいころからぼくはとても活発で、勉強も大好き  
だった。ぼくはいつもなにかあたらしいことがなら  
いたくて、はやくから読み書きや計算をおぼえたんだ。  
両親はぼくのことをへんな子だとおもってた。だ  
て、おない年の友だちとはちがって、道であそぶより  
も本をよむことのほうがたのしかったんだから。

父さんはぼくに皮なめし職人の仕事をおぼえてほ  
しかったみたいだけど、ぼくはその仕事じゃぜんぜん好  
きじゃなかったんだ。だから仕事場に行くといつもと  
んでもないことをやらかして父さんをこまらせてい  
た。

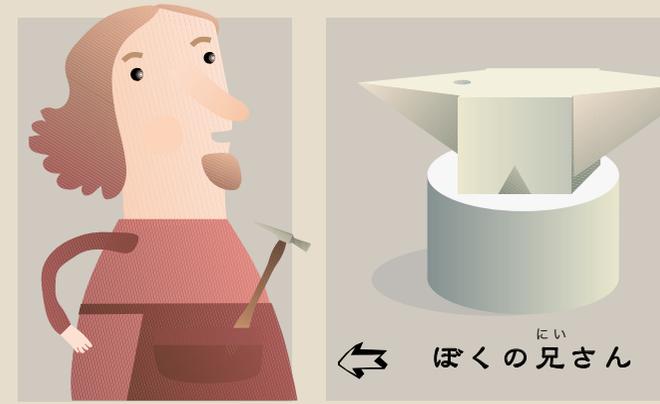


仕事場に  
来ちゃだめだ

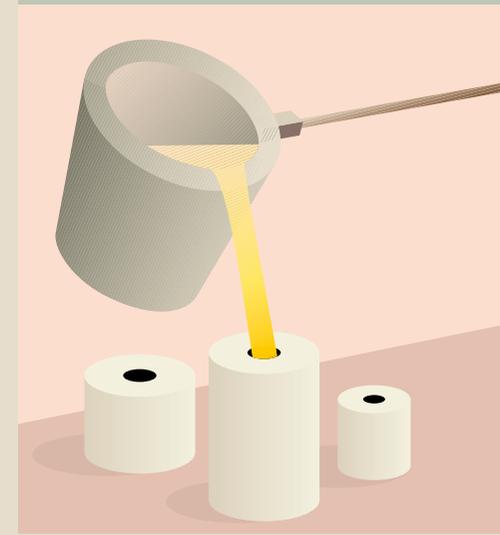
それである日のこと、父さんはぼくをアントニオ兄  
さんのところにやって、金細工の仕事ならわせるこ  
とにした。ぼくはそっちのほうがぜったい気に入るだ  
ろうとおもったから。

そのとおりだったよ。ぼくは15才年上のふとっ  
ちよ兄さんのことが大好きで、とても気があったし、兄  
さんもぼくをかわいがってくれていたんだ。兄さんは  
ぼくのやりたいことをなんでもさせてくれて、仕事  
をしているとき、そばで見ることをゆるしてくれた。

兄さんの仕事場でぼくはたくさんのお金をもら  
ったけど、とくにデッサンが大好きだった。それで19才  
のころからほんものの画家になることを夢見るよう  
になったんだ。



ぼくの兄さん





とうほう はかせ れいはい  
**東方三博士の礼拝**

1475年、フィレンツェ、ウフィーツィ美術館

この絵を注文したのはガスパール・ディ・ザノービ・デル・ラーミ。ガスパールさんはフィレンツェの支配者だったメディチ家の人たちのしたい友だちだったから、絵のなかに3人の博士やイエスさまの一家だけでなく、メディチ家や宮廷のえらい人たち、それに自分の肖像（右上の青い服の人）もかいてくれとたのまれたんだ。

ぼくもいるんだよ。絵の右下のほうにきみを見ている人がいるだろう。それがぼくさ。





はる

## 春

1482年ごろ、フィレンツェ、ウフィーツィ美術館

春はるというと、ぼくはいつでもこのきれいな庭にわのことをおもいうかべる。ぼくの絵のまん中には美びの女神めがみヴィーナスがいて、そのあたまの上では、キューピッドが弓をかまえている。左ひだりのほうではヴィーナスにつかえる3人の美びの女神めがみが輪わになってたのしそうにおどっていて、神かみさまのメルクリウスが庭にわから雲くもをおいはらっている。

右みぎでは、西風にしかせゼピュロスにつかまえられたニンフのクロリスが、びっくりしてにげようとしている。そしてそのとなりでは、春はるの女神めがみフローラがいいかおりの花はなをあたりにまきちらしている。





絵の色をよく見て。ぼくがこの絵につかったのはみっつのパレットのうちどれだろう。



1

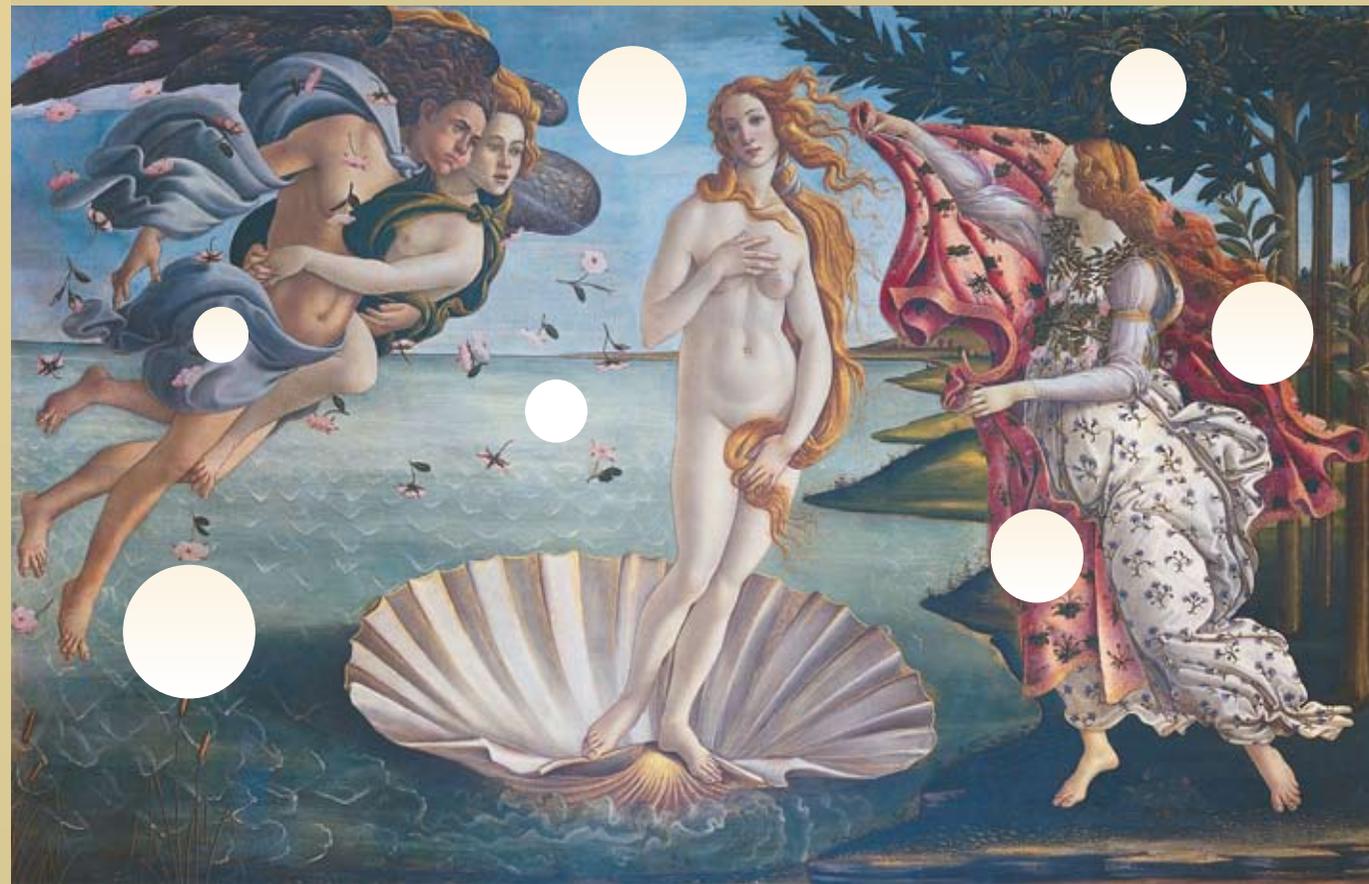


2



3

さあ、たいへんなことになった。ネズミがぼくの絵をかじったもんだから、絵にいくつもある穴があいちゃった。なおすのをてつだってくれないか。絵をよく見て、たりないところに色をぬってね。



ネズミは絵が大好きなんだ



## もくじ

ぼくのはなし	p.	3
こんどはぼくの絵 <small>え</small> であそぼう	p.	19
とうほう はかせ れいはい 東方三博士の礼拝	p.	20
しょさい せい 書斎の聖アウグスティヌス	p.	24
せいぼ マニフィカトの聖母	p.	28
はる 春	p.	32
パラスとケンタウロス	p.	36
たんじょう ヴィーナスの誕生	p.	40
じゅたいこくち 受胎告知	p.	44
ひぼう 誹謗	p.	48
もうすこしあそぼう	p.	52
こたえあわせをしよう	p.	57

2009年7月印刷

印刷：ジェーネジ、チッタ・ディ・カステッロ

発行：s i l l a b e